

三、板碑とは

板碑とは板石で造った供養塔のことで「いたひ」「いたび」「はんび」「いたぼとけ」などと呼ばれているが、今日文化財保護委員会などでは「板石塔婆」の名称が用いられている。

板碑は日本の全域に分布し、南は薩摩半島の南端開聞岳山麓から、北は北海道の網走に応永紀年銘の板碑が発掘されている。このほか東北、関東、近畿、四国、九州の各地方には、それぞれ素材（石質）にあった形態を示したものが残されている。

このように板碑は総じてその土地の石材を利用するから、石質は一定していない。ところが、関東から甲信越にわたっては、板状にはがして加工し易い秩父産の緑泥片岩、いわゆる「青石」が使用されることが多い。そして「青石塔婆」の名称がすでに板碑の盛行した鎌倉時代に使用されていたことを、昭和初年に稲村坦元氏が指摘し、この名称を提唱された。

武蔵野に所在する板碑は、ほとんどが、荒川上流産の別名秩父石、下里石を用いている。板状に加工され、頂部を三角形に作り、その下には横に二条線の切り込みがある。塔身部の上部には、仏の種子（しゅうじ）または、仏像（画像）などで主尊を刻み、その下には、紀年銘のそのほか、偈文、真言、造立趣旨、人名などを刻んだものである。

板碑は卒塔婆の一形態であり、その造立の趣旨は僧に供養したり、写経、読経したり、造寺、造塔すると同じ意味を持ち、いわゆる現世、来世に対して善根をつむことを意味する。そして、死者のためのみでなく、現

在生きている人々の造立（逆修供養）もみられる。（19、25、29、37、43 後表以下同じ）。

種子を安置するための蓮座、威徳をあらわす円光（月輪）でこれをかこむこともある。種子を荘嚴にするために、天蓋（てんがい）璎珞、（よろらく）をえがき、さらに、香華（花瓶）を供えた図をあらわす例もある。

（29、38、59）

また板碑には偈や真言を刻み仏の功徳を讃詠するものがあり、偈を刻むものは（4）に見られ浄土三部経の中の『観無量寿経』の一節で「光明はあまねく、十方世界を照し、仏を念ずる衆生を、攝取して捨てたまわず」と解されている。光明真言は密教の真隨ともいうべき真言で、梵字二十四文字で表し、オン（帰命）アボキヤ（不空）バイルシャナー（光明遍照）ルシャナー（如来）マカームダラ（大印）ハラバアラタヤ（転）ウーン（菩提心）ソワカ（成就）を意味し、その大意は、「帰命効験空しからざる遍照の大印、すなわち大日如来の大光明の印よ、宝珠と蓮華と光明の大徳を有する智能よ、われ等をして菩提心に転化せしめよ」と説かれ、これを誦すれば一切の罪障はたちまち消滅し、極楽浄土に往生出来るといわれ、盛んに信仰されたようである。

市内の板碑を大別すると、主尊として、阿弥陀如来（キリク）を刻んだものが絶対多数で、五十一基（主尊が欠けたもの十五基）中四十七基で九二%をしめる。弥陀一尊に対し、観世音菩薩（サ）および勢至菩薩（サク）を合せたいわゆる弥陀三尊と称するものが十四基ある。

そのほかは釈迦如来（バク）二基、金剛界大日如来（パン）二基、いずれも四尊である。

釈迦種子のものは、この西多摩地方には比較的少ないものとされてきた

が、最近の調査で検原村十四基（鎌倉3、南北朝4、年号不明7）、青梅市十三基（鎌倉4、南北朝3、年号不明6）、日の出村四基（鎌倉1、年号不明3）、五日市町三基（鎌倉1、年号不明2）の合計三十六基が確認された。年号不明のものも半数をかぞえるが、それらは確認されたものが鎌倉、南北朝期に限られる点などから、その時代のものと見て差しつかえないと思われる。

大日如来の種子を主尊とするものは、当市のほかには五日市町に一基（鎌倉時代）、青梅市に一基（南北朝期）が知られている。当市の二基がいずれも蓮座を伴わない点注意を要するが、それが何を意味するかは今後の研究課題の一つであらう。

なお、当市内では、題目、地藏、十三仏、月待、庚申などの結衆板碑は見られない。

板碑の大きさとしては、青石採石場の跡と伝えられる地点のすぐ下手にある、秩父郡野上町野上下郷の応安二年（一三六九）の大板碑は高さ五メートルを越えるものがあるが、当市内では(63) 斎藤家所蔵の高さ九十九センチ、巾二十九センチが最大で、最小は(33) 松原庵所蔵の高さ三十五センチ、巾十三センチである。板碑の大きさは、それを建てたものの勢力および経済力を象徴したのを見ることができようが、当時の交通、運搬などの面からも容易なことではなかったとおもわれる。

全国最古の板碑は、埼玉県大里郡江南村須賀広の嘉禄三年（一二二七）の弥陀三尊浮彫板碑であり、最新のものは同じく埼玉県戸田市の慶長三年の題目板碑とされている。

西多摩地方での初期の例はそれより五十年下った建治三年（一二七七）の日の出村のものを最古とし、最新のものは青梅市黒沢の天文十二年（一

五四三）で、両者が画像板碑であることは興味あることといえよう。当西多摩地方に現存する初期、末期の板碑は次の通りである。

初期板碑		末期板碑	
地区	年 代	地区	年 代
福生市	嘉元二年（一三〇四）	福生市	永正七年（一五一〇）
青梅市	弘安五年（一二九五）	青梅市	天文十二年（一五四三）
秋川市	延慶二年（一三〇九）	秋川市	応永廿六年（一四一九）
日の出村	建治三年（一二七七）	日の出村	文明十七年（一四八一）
羽村町	永仁三年（一二九五）	羽村町	明応六年（一四九七）
瑞穂町	正安二年（一三〇〇）	瑞穂町	天文廿一年（一五五二）
松原村	嘉元三年（一三〇五）	松原村	寛正七年（一四六六）
奥多摩町	正応□年（一二八八） （一二九二）	奥多摩町	天文十一年（一五四二）
五日市町	嘉元四年（一三〇六）	五日市町	明応三年（一四九四）
所 在		所 在	
加美院	永昌院	熊川院	福生院
今井正福寺	正福寺	黒沢聞修院	聞修院
草花塩野氏	塩野氏	野辺普門寺	普門寺
平井西光寺	西光寺	本宿河久保氏	河久保氏
箱根ヶ崎東小学校出土	東小学校出土	羽介山記念館	介山記念館
丸福寺	丸福寺	二本木長福寺	長福寺
人里小学校裏	人里小学校裏	笹野田中家裏	田中家裏
星竹山下氏	山下氏	倉野	倉野
		北伊奈	北伊奈
		巖正寺	巖正寺

当市内においては初期板碑が、福生、熊川両地区に同年代（嘉元）で、しかも同じ、「釈迦」の種子であることと、「私年号板碑＝福徳年」銘のものが両地区より一基ずつ発見されていることが興味深い。「私年号」は朝廷で定めた年号に対し、民間独自によつて使われた年号で、正史には見えないが文書、金石文などに見られるものをいい、西多摩地区にも、「福徳」の板碑は、青梅市三基、奥多摩町一基の計六基が知られている。

なお、南北朝時代における板碑の紀年銘はごく一部をのぞいて北朝年号に限られている。このことは板碑一般に共通することであり、これによつてその時代の勢力範囲を知ることが出来るといえよう。関東一帯に共通することでもある。

福生市現存板碑の時代別と種子別分布

時代	総数	福生地区	熊川地区	市外搬入 のもの再掲	種子(主尊)別分布	釈迦	大日如来	阿弥陀(キリーク)		欠損
						(バク)	(バン)	一尊	三尊	
鎌倉時代 (1274~1334)	4	1	3	0	①	2	0	①	1	0
南北朝時代 (1335~1392)	18	① 14	② 4	3		0	1	④ 14	2	1
室町時代 (1393~1543)	25	② 13	② 12	4		0	0	③ 10	③ 9	⑥ 6
戦国時代再掲	9	① 4	5	1		0	0	4	2	3
計	47	③ 28	④ 19	7		2	1	25	12	7
年代不明及断碑	19	② 14	① 5	3		0	1	② 8	① 2	② 8
合計	66	⑤ 42	⑤ 24	10	①	2	2	⑩ 33	⑤ 14	⑧ 15

備考 文献(昭和32年)のみにて現存せぬもの三基。応永32年(弥陀)=清岩院。文明14年(弥陀)福生院墓地。文安□年(弥陀)=福生院墓地。

主尊別百分比は釈迦4%、大日4%、弥陀一尊50%、弥陀三尊22%、不明22%、現存66基中紀年銘の判るもの47基、主尊の判るもの51基である。

○印の中の数字は福生市外のものを示す。

◎種子別分布の○印は熊川地区分を再掲したものである。